

## 庭野平和財団助成事業報告書

被助成者：公益財団法人とよなか国際交流協会

コード番号：14-A-374

多文化子どもエンパワメント・メディアプロジェクト（EMP）2014

（別名「トモダチ作戦」）

### ◆活動の背景と目的

とよなか国際交流協会（以下、協会）は、「市民の主体的で広範な参加により、人権尊重を基調とした国際交流活動を地域から進め、世界とつながる多文化共生の社会をつくる」を理念に掲げ、1993年、豊中市によって財団法人として設立され、2012年4月1日からは、公益財団法人に認定された公益目的事業を多くの市民協働者とともに展開している。また、協会設立と同時に豊中市によって設立されたとよなか国際交流センターの管理・運営も行っている（2011年度より指定管理者となる）。

協会事業は、地域や学校をパートナーに「地域づくり」「人づくり」を推進しながら総合的な外国人支援の「しくみづくり」を目指す29事業で構成されている。柱となるのは、地域に住む外国人のための日本語交流活動、多言語スタッフによる相談サービス（タイ語・フィリピン語・スペイン語・ポルトガル語・インドネシア語、韓国・朝鮮語・中国語・英語）、外国にルーツをもつ子どものためのサポート事業などである。特に外国人にとっての「安心やエンパワメント（なくされた力を取り戻すこと）」「自己肯定感」「ピア（同じ立場の仲間）やロールモデル（目標となる生き方のモデル）の育成」などが重視される。

子どもサポート事業が展開される背景には、豊中市が外国人の少数点在地域であることから外国にルーツをもつ子どもたちが同じような背景をもつ仲間に出会うきっかけや、自分の文化的背景を積極的に押し出せるような機会が少ないことがある。そこで、母語や母文化の学習を通じて、仲間と出会い、自尊感情を高めるための「子ども母語」（インドネシア語・スペイン語・ポルトガル語・中国語）、大学生ボランティアと勉強や表現活動を行う「サンプルイス」などが実施されている。豊中市教育委員会との協働では、2006年より外国につながる子どもやその保護者、学校教員を中心とするおとながつどい、交流を深めるための「多文化フェスティバル」が年に1回開催されている。

豊中市には、1970年代頃から在日韓国・朝鮮人教育や帰国児童生徒教育に熱心に取り組んできた土壌があり、近年はいわゆる新渡日の子どもの教育にも目が向けられてきた。しかし、多文化な子どもたちが文化的な背景を押し出して自分を表現することのできる場や機会はまだまだ少ない。他方で、従来のような「在日外国人の子ども」と一括りにすることができない現実が、子どもたちの生活実態や意識において現れ始めているのも事実であ

る。親の定住化傾向や国際結婚、日本国籍取得などの増加により、日本生まれ・日本育ち、ダブルの子ども、日本国籍の子ども、また母国と日本を往来する子どもなどが増えており、生育環境、家族形態、国籍や名前において、グローバルに多種多様な「外国につながる子ども」が存在している。そうした子どもたちには、国家、国籍、ルーツ、ことば、文化がひとつに固定されない、多様な文化で構成される活動やそのような自分自身が肯定されるような取り組みが必要とされているが、子どもたちがもっとも多くの時間を過ごす学校現場について見れば、プライバシーの問題で子どもの背景をつかみにくくなり、「外国につながる子ども」の存在が潜在化する傾向にある。

こうした背景のもと、2012年度より継続して庭野平和財団の助成を受け、多文化子どもエンパワメント・メディアプロジェクトに取り組んでいる。協会に集う外国につながる若者たちが中心となって映像作品制作を行うなかで、子どもや若者たちが仲間と出会い、それぞれの文化的な背景や多様な文化の織りなす自分自身を積極的にとらえ、さまざまなかたちでの発信方法を身につけることを目指している。

2012年度には映像作品「ナニジン？ートモダチ作戦（以下、ナニジン？）」を完成させ、2013年度はその映像作品を様々な場で上映し、社会発信と対話の場、ネットワークの構築を進めると同時に、外国につながるのあるひとりの若者の「経験」と「想い」に焦点をあてた新たな作品づくりのための撮影を沖縄で行った。2014年度は、これまで取り組んできた「ナニジン？」の上映会の中で得た作品へのコメントや評価などをフィードバックさせながら、2013年度に行った撮影の分析・編集作業を進め、新たな作品「ぼくと沖縄と みんな」の完成を目指した。

#### ◆研究活動の内容と方法

2012年度にはじまった本プロジェクトは、別名「トモダチ作戦」という。潜在化する外国にルーツのある子どもや若者たち（「ダブル」「クォーター」「混血」等）の存在を発信し、メディアを用いたネットワークやつながりを生み出すことを目的にスタートした。メンバーは、外国にルーツがある若者が中心となって、メディア研究者や日本人など関心を同じくする者が集まり、「てーげ一部」という名称で活動している。2013年度は前年度のメンバーに加えて、つながった「トモダチ」がメンバーとして加わるなど、さらなる展開を見せた。

2014年度の活動は、新たな作品の完成にむけた昨年度実施した沖縄での撮影映像の編集作業が中心となった。メンバーの多くがそれぞれ仕事や育児、学業等に忙しく、思うように編集作業を進めることができず完成が大幅にずれ込んでしまったが、2015年9月ようやく新作「ぼくと沖縄と みんな」が完成した。

(\*本プロジェクトでは、あえて「混血児」という表現を使用している)

### (1) 映像作品の制作

新たな制作活動として2013年に実施した、ある外国にルーツを持つ若者と「沖縄」をめぐる撮影の映像の分析・編集を重ね、新たな作品「ぼくと沖縄と みんな」の完成を目指した。撮影のきっかけとなった外国にルーツを持つ若者(トーマス)の「経験」や「想い」のどの部分をどのように伝えるのか、どうすればそれが伝わるのか、何度もミーティングを重ねて編集の方向性を丁寧に話し合った。また、前作の「ナニジン」の内容や技術面に対する感想や指摘をできる限り反映させることを心掛けた。

### (2) 映像作品の広報や交流を通じた「トモダチ」の輪の広がり

2012年度に制作した映像作品「ナニジン？」は、これまで上映会を主催したり、講演依頼の際に上映やDVDの紹介をしたりするなど、様々な機会を使って広報をしてきた。これまでに頒布したDVDは100近くに上り、学校の国際理解教育や人権学習、「在日外国人教育研究集会」(2013年度)などでも使用されてきた。詳しくは後述するが、人権学習で「ナニジン？」を観た外国にルーツを持つ小学生から感想文が届いたことで、新たなつながりが生れた。また、本プロジェクトを応援してくれているX県立教員Aさんの紹介で、X県Z市立図書館の館長と知り合うことができた。館長は市内に暮らす外国にルーツを持つ子どもたちの支援を何かできないかと以前から考えており、Aさんから本プロジェクトについて話を聞き興味を持ってくださったという。本プロジェクトのメンバーと共に、外国にルーツを持つ子どもの支援にむけたイベント等の開催をめざし、その第一歩として2015年3月にZ市を訪問した。

### (3) 研修及び対話

メンバーが表現やメディア、若者支援や居場所づくりについて学ぶ機会をつくった。メンバーそれぞれの立場や経験、思いを共有することを何より重視し、毎回の集まりで日常的に実施した。

また、豊中市成人式「ハタチフェスタ」では、とよなか国際交流協会のブースにおいて映像作品を上映し、新成人や保護者とともに、対話を通じて映像表現の可能性について語り合うとともに、作品についてのフィードバックを得る機会をつくった。

### (4) 社会提起や提案

講演や上映を通じて、これまで以上に伝えたいメッセージやプロジェクトの目的が明確になってきた。豊中市や外国人支援にかかわる団体をはじめさまざまな関係機関への発信を進めたり、新聞に活動が掲載されるなど、少しずつ社会提起の場が増えた。

2014年度はメンバーの一人が移民政務学会の2014年度冬季大会シンポジウム「外国にルーツをもつ若者たちのさまざまな発信で変える社会」においてパネリストとして参加し、本プロジェクトや映像作品について発表する機会を得た。また、一人のメンバーが取材を

受け、かれの生い立ちと共に活動が新聞に掲載された。

#### ◆活動の実施経過

##### ①新作映像作品の分析・編集

新作はメンバーの一人・トーマスに焦点をあて、かれの「過去・現在・未来」をテーマに取り組むことになった。かれにとっての「過去・現在・未来」が示される「沖縄」で2013年に本助成を受け撮影合宿を行った。今年度は毎月2回のペースでミーティングを持ち、新作で中心人物となるトーマスの想いや考えを丁寧に共有しながら映像の分析・編集作業を進めた。ミーティングではテロップやナレーションについても話し合い、ナレーションはメンバーが行うことにした。テロップの編集作業やナレーションの録音・挿入を行い、映像作品を仕上げた。

##### ②映像作品の広報や交流を通じた「トモダチ」の輪の広がり

##### ●とよなか国際交流センター内で開催のイベント「とよなか国際交流フェスタ」での広報 (9月6日、於とよなか国際交流センター)

本プロジェクトの活動拠点となるとよなか国際交流センターで開催されたイベントにて、制作中の新しい作品の告知を行った。「とよなか国際交流フェスタ」は、とよなか国際交流センターの指定管理者であるとよなか国際交流協会と地域の市民団体が構成される運営委員会が主催するイベントで、来場者にDVD「ナニジン？ートモダチ作戦」の紹介ならびに次回作の予告を行った。



発表の様子

次回作となる「ぼくと沖縄と みんな」は当時未完成であったが、基本的なコンセプトは固まっており、「沖縄作戦(仮)」と呼んでいた。前作「ナニジン？」を観てくれた方をはじめ、イベントに参加していた多くの方に関心を持って頂いた。

##### ●Y県の小学生とのつながりー新たな「トモダチ」へ

Y県のある小学校で人権・同和教育を担当した教員が、2013年度の「在日外国人教育研究集会」で「ナニジン？」のDVDに出会い、その後人権学習でDVDの上映会が開催された(この経緯について詳細は2013年度の報告書を参考されたい)。その人権学習に参加しDVDを観た外国にルーツをもつ小学生B君と、その友達Cさんから、DVDの感想と自分の想いを綴った手紙が届いた。B君は外国にルーツを持つことで悩みを抱えており、そのことを心配した先生がB君にこのDVDを見せてくれたのである。

B君の手紙には、繰り返しDVDを見たということ、ルーツのある人たちが助け合ってい

るのはすごいと思ったこと、Cちゃんの手紙には、普段当たり前に使っていた「ハーフ」や「クォーター」という言葉の意味を改めて知ったということ、仲間は必要だと思ったこと、などが感情をこめた表現でつづられていた。

(先生からの手紙)

てーげ一部のみなさま

B君のことでは、たくさんお世話になり、感謝の気持ちでいっぱいです。B君は9回もDVDを見たといっていました。そして10回目は信頼のおける友達のCちゃんと一緒にみました。Cちゃんは相手の気持ちに寄り添うのが上手な子です。

B君は自分が悩んでいることをCちゃんに話せてうれしいようでした。気持ちが少し軽くなったようでした。DVDをみながら自分のことを話すのは、仲間がそばにいてくれるような感覚だったと思います。

B君のことを支えてくださって本当にありがとうございます。

この手紙を受け取ったメンバーは話し合い、その返事としてビデオレターを送ることに決めた。外国にルーツを持つ先輩として、メンバーがそれぞれB君に伝えたいメッセージをビデオに撮ってDVDを作成し送った。すると再度、B君と先生からお礼の手紙が届いた。B君からの手紙には、外国人ということで悪口を言われるのが苦しいこと、てーげ一部の人たちを友だちとして支えにしたいということが書かれていた。

(先生からの手紙)

とよなか国際交流協会てーげ一部の皆様

・・・(略)・・・このたびはB君へビデオメッセージをくださってありがとうございました。私自身は日本生まれで日本文化のなかで育ってきているので、B君に寄り添いたいのになんと理解してあげられないというもどかしさを感じていました。ビデオを私も拝見させていただきましたが、みなさんが当事者として乗り越えてこられた心の強さのようなものを感じました。・・・(略)・・・お返事を考える中で、彼は「苦しい」という言葉を使いました。これほど素直に自分の心の中を出せることはめったになく、てーげ一部のみなさまの人生経験と語りの賜物だと思って感謝しています。

こうして、大阪から遠く離れたY県に「トモダチ」ができた。本プロジェクト「トモダチ作戦」の目的であった、外国にルーツを持ち、潜在化されている人たちとつながり、友達になることを、まさに達成したのであった。

#### ●Z市作戦

メンバーの古くからの知り合いで、本プロジェクトのよき理解者でもあるX県立高校の

教員 A さんから、2013 年の冬頃に X 県 Z 市立図書館の館長を紹介された。館長は市内に住む外国にルーツを持つ小中学生の支援を何かしたいと考えており、そのアドバイスを A さんに求めたところ、A さんが「外国にルーツを持つ若者が「てーげ一部」って面白いことをやっている。コラボで何かやってみれば？」と話したのだという。

その後、2014 年度に入り、2 度ほど話し合いを重ね、Z 市立図書館で外国人の親子を対象とした簡単なイベントを企画してはどうかという話になった。しかし、2014 年 6 月に Z 市立図書館のリニューアルオープン、同年 8 月には Z 市がゲリラ豪雨による大水害に遭ったことで、残念ながら企画はいったん白紙となってしまった。しかし、せっかくできたつながりを大切にしたいということで、2015 年 3 月に Z 市への訪問合宿を行った。

Z 市訪問では、館長に Z 市図書館ならびに市内を案内していただいた。そのなかで、館長の外国にルーツを持つ子どもたちへの想いを改めて伺った。Z 市図書館の現状として、今すぐにコラボ企画を実施することは難しいが、そうした状況に置いても「てーげ一部」としてどのような企画が実現可能であるのか再度考案し、焦らずゆっくりとコラボ企画を進めることになった。



図書館の前で



図書館の内部を見学



Z 市市内の歴史的な灯籠

### ③研修及び対話

#### ●定期的な対話の場づくり（月 2～3 回程度、日曜日）

メンバーが表現やメディア、若者支援や居場所づくりについて学ぶ機会をつくった。メンバーそれぞれの立場や経験、思いを共有することを何より重視し、毎回の集まりで日常的に実施した。

#### ●豊中市成人式「ハタチフェスタ」への参加（1 月 12 日、於 大阪大学豊中キャンパス）

豊中市成人式「ハタチフェスタ」では、とよなか国際交流協会のブースにおいて 2 映像作品（2012 年度制作の「ナニジン？ートモダチ作戦」、制作中の「ぼくと沖縄と みんな」予告編）を上映した。会場は、新成人の休憩・待合コーナーの一角にあり、他の国際交流

に関する活動を行う団体の展示もあるなか、気軽に立ち寄ってもらえる雰囲気を出した。

新成人や保護者との対話を通じて、映像表現の可能性について語り合うとともに、作品についてのフィードバックを得る機会をつくった。



会場の様子

新成人でにぎわうブース

#### ④社会提起や提案

●移民政策学会 2014 年度冬季大会シンポジウムにて発表（12 月 13 日、於 大阪大学豊中キャンパス）

かねてより本プロジェクトを知っていた大学教員からの依頼で、メンバーの一人が登壇者としてシンポジウムに参加することになった。シンポジウムは「外国にルーツをもつ若者たちのさまざまな発信で変える社会」をテーマとしており、関西を拠点に発信活動に取り組む外国にルーツをもつ若者たちがパネリストとなり、当事者として発信活動を行う社会的意義について考えることを目的として開催された。

その中でトーマスは自分の生い立ち、トモダチ作戦を始めるに至った経緯と実践報告、そこから見える「外国にルーツを持つ若者」が抱える課題や、当事者が発信していくことの可能性などについて話をした。

#### ●毎日新聞への掲載

「てーげー部」設立の発起人となったトーマスが毎日新聞からの取材を受け、2015 年 1 月 14 日(水)の夕刊 2 面「特集ワイド」にて掲載された。



◆活動の振り返り（感想より）

2014年11月、前作「ナニジン」を観て感想を寄せてくれたA国にルーツをもつY県の少年にビデオレターを送り、その返事が来た。少年は友人と一緒に返事をくれた。Y県で僕らの映像を見て考え、僕らとやり取りする中で彼は彼自身の事を考え、自らの口で友人と共有し一緒に返事をくれた。人と繋がりたい、誰かに発信して共有したい。そんな思いで作った映像作品「ナニジン」が、遠く離れた地の少年の目にとまりその彼がまたそれを周りに発信する。この出来事は彼にとって大きな経験になったと同時に僕らにとっても大きな意味を持つ経験になった。

Y県の繋がりと共に大切な繋がりになったのがZ市の図書館との繋がりで。Z市の図書館とは2013年から繋がっている。そして2015年3月、僕らで一げ一部はZを訪問、図書館内の見学、交流、市街地のフィールドワークを通して繋がりを深めた。今後この繋がりを大事にしながら、共催出来るイベントなどを模索していきたい。

僕はこの一年で特筆したいのは映像の編集だ。2014年2月、僕らで一げ一部は沖縄を訪問。当初の予定ではその年の夏には映像作品としてまとまるだろう、そう踏んでいた。しかし、編集作業は難航する。それには訳があったと、今なら言える。沖縄は僕がルーツを追い求め大学に進学する際に行きついた場所。その沖縄での出会いと出来事は、当時の僕にとって様々な意味で刺激的で、最終的に僕は大学を中退、全てを投げ出し沖縄からかえってきた。この挫折を今一緒に活動をするメンバーと共有する。この共有するという作業は、裏を返せば僕自身が沖縄を見つめ直し落とし込む過程をメンバーに見てもらった。そしてその沖縄を見つめ直し落とし込む過程というのが編集作業だった。そして2015年、新しい映像作品「ぼくと沖縄と みんな」は完成した。2016年はこの作品をもって更なる繋がりを追い求めていきたい。（トーマス）

「ぼくと沖縄と みんな」の編集をする中で何度か、て一げ一部のメンバー以外の人に作品を見てもらったことがありました。その時に出来たところまでを見てもらい、そのあとに感想を話してもらいました。その中で、自分に重ね合わせた感想や発言がありました。

トーマスの過去、現在、未来を追った作品で、見た人が自分のことを振り返ったり自分のまわりの人のことに思いをめぐらせることができるのは、素敵なことだと思います。なぜなら、大部分の人には、自分について話す機会がほとんどない、あるいは、「自分には人に話すほどの物語がない」と思っているからです。この作品をきっかけに、広く世間に向けてではなくても、身近な人たちに向けて、「私にもこんなことがあったんだ」「今、こんなふうに思っているんだ」と話せる人がもっと増えればと思います。

今年度は、前作を見たY県の小学生や、Z市の図書館の館長との出会いもありました。Y県の小学生は、前作を見て、自分のルーツ、今思うこと、体験していることを聞かせてくれました。図書館の館長も、私たちが視察に訪れたとき、市内を案内しながら、彼の目線



や体験を通したその町の歴史と、暮らしてきた人の背景を聞かせてくださいました。彼らとの出会い、「ぼくと沖縄と みんな」を見た人との出会いから、私たちにも新たな気づきがありました。私たちは、映像作品の発信をしていく活動ではありますが、発信していく中で、出会った人たちから多くのことを受信しているのだと、今年度は改めて気づきました。

この双方向の関係を、今後も続けていきたいと思います。(N)

#### ◆活動の成果

本プロジェクトは、潜在的に多く存在する「ハーフ」「クォーター」「混血」など、外国にルーツを持つ人たちとメディアを通じてつながることを目的に始まった。会ったこともない、顔も知らない、でも、必ずどこかにいるはずの「トモダチ」。外国にルーツを持つことで自信を無くし、声も出せず、生きづらさを感じながら小さく縮こまっているかも知れないまだ見ぬ「トモダチ」に、「君は1人なんかじゃない。同じように悩みながら生きてきた僕たち、私たちがここにいるよ！」という私たちの呼びかけはしっかり届くものなのだ、Y県に住むB君が改めて気づかせてくれた。

これまで実施してきた映像作品の作成や上映会においても外国にルーツを持つひとたちとのつながりが生まれていたが、その多くはとよなか国際交流協会／センターを軸にしたつながりだった。しかし、今回、活動拠点である大阪からは遠く離れたY県の地で、私たちの作品が少年B君の心を動かし、かれと「トモダチ」になれたことが何よりも大きな成果であった。「トモダチ」を作りたいと必死に本プロジェクトを進めてきた目的が達成された喜びをメンバー全員が噛みしめている。

また、具体的な取り組みへは発展しなかったが、Z市図書館館長との出会いもまた大きな成果であった。教員Aさんとのつながりが、Z市図書館とのつながりへと広がっていき、そして今後はZ市に住む外国にルーツを持つ人々へつながりを広げていきたいと、まだ見ぬ「トモダチ」の存在にドキドキ、ワクワクしている。

そして、少しずつ、少しずつ、過去を振り返る苦さや未来への不安や希望を抱えながら編集。分析作業を行ってきた新しい映像作品。完成するのに当初の予定を大幅に上回り、1年近くかかってしまったのは、単にメンバーの時間的制約があったから、ではないだろう。

分析・映像作業はトーマスが自身の「過去・現在・未来」と対峙せねばならず、それは時に苦しみを伴う作業でもあった。同時にかれがその中で何を語り伝えたいとしているのか、他のメンバーたちも一緒になって悩み、考え、トーマスと重ねあわせながら自分自身の「過去・現在・未来」を振り返っていた。そうして完成した新作「ぼくと沖縄と みんな」は、外国にルーツを持つ人々だけでなく、人生のどこかで挫折を経験したり、今何か悩みを抱えたりしている人たちにとって、どこか共感できるもののある作品になった。

◆今後の課題

新作を上映し、参加者とのコミュニケーションや対話を進める (①) と同時に、つながった人びとと緩やかに集まれる場の必要性も感じている。そのため交流の場をつくる (②)。これまでのプロジェクトをもとに、外国にルーツがある人びと (特に子どもや若者) がディスエンパワー (力を奪われる) される要因について社会提起し、関係機関との連携をはかっていく (③)。

①新作の上映とコミュニケーション

②外国にルーツのある人びととの緩やかなつながりの場をつくる

③ディスエンパワーされる要因について社会提案し、関係機関と連携する



活動ユニフォーム